

僕は小学生の頃から建築家を志していた。大学で建築を学び始めるも、もつすでに日本全国の空き家の数は七百万戸を超え、実は過剰になっていた。それでも大学の教授たちは僕たちに、建築の設計方法を教えようと試みる。しかし僕の頭には入らず、結局、大学には行かず街を歩き回っていた。

最終的に僕は隅田川に住む路上生活者の師匠と出会う。彼は小さな太陽光パネルで自家発電し、自動車の12Vバッテリーをも

とにした電気システムを構築し、どこにも属さない独自の生活圏・経済圏をつくり出すことに成功していた。土地なんか、お金なんか、所有できるわけがないという僕の根源的な問いに答えてくれたのが師匠だった。

*

僕たちは、大地という地球から与えられたものを私有化し、水も動物も自分たちのものと勘違いしている。それが子供のときから疑問だった。でも、誰も答えてくれない。

「0円生活圏」目指す



坂口 恭平

そんなことを言っていると生活していけなくなるよ、と脅しをかけられるだけだった。しかし、ついに出会った師匠は僕に、土地は所有するものではなく使うものだ、家は買うものではなく自分の手で建てるものだ、と教えてくれた。大切なのは、金ではなく人だ、とも。

そして昨年の三月十一日、東日本大震災が起こる。続けて福島第一原発事故で放射能が世界中に散らばり、焦った

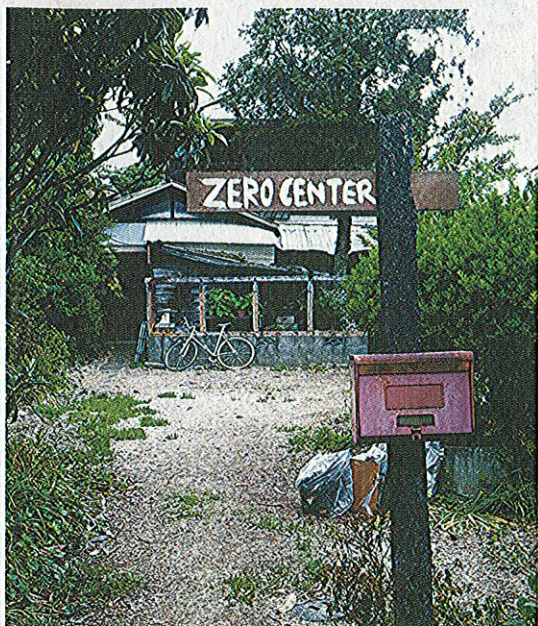
僕は妻子を連れて生まれ故郷である熊本に避難する。その時、機能不全に陥った政府をテレビで見ている妻が言った「今、日本は無政府状態ね」という言葉を聞き、それではまずいと僕は勝手に「新政

府」を立ち上げ、その「初代内閣総理大臣」に就任した。築八十年の日本家を再生、そこをゼロセンターと呼ぶ避難所にして東日本からの避難者百人を無償で受け入れた。六十人は完全に移住した。さらには自腹で、福島の子供五十人を無料二週間、熊本に招待するサマーキャンプも実施。大変ではあったが独自に始めた「自治」は、多くの人の協力をもって全て実現した。なぜ現政府はあんなに迷っているのか分からなくなったくらいだ。

*

新政府の憲法は第一条だけだ。それは「困った人がいたら助けよう」ということだ。それが人間として一番自然な姿だと思ふ。

おかげで今は一万五千人の「国民」と呼ぶ理解者がいる。どんなものでも、お金すら瞬時に集まる強固な共同体である。同時に命の電話も創設し(090・8106・4666)、自殺の不安などに苦しむ人ともコミュニケーションを取っている。



築80年の日本家を再生して造った避難所ゼロセンター

3・11機に 独自の自治体築く

勝手に政府を立ち上げると反逆罪になるので、僕はこれを「芸術」であるということにした。僕はカナダで現代美術家としても活動しているので、自分で描いた美術作品を「貨幣」とみなしてカナダドルと両替し、その資金を国家予算にし

ても活動しているので、自分で描いた美術作品を「貨幣」とみなしてカナダドルと両替し、その資金を国家予算にし

この言葉は、先日新装版が出た『ゼロゲロブスカ』(エンターブレイン)にも通ずる。チェルノブイリ事故から広がる未来への不安がテーマの暗黒漫画。あとがきの「子供たちよ、死を恐れる健康の奴隷ではなく、無常を悦ぶ冒険者であれ」との願い。これこそが、しりあがり世界を貫く、ゆるく強靱な思想かもしれない。

さかぐち・きょうへい 建築家・作家 1978年生まれ。著書に『ゼロから始める都市型狩猟採集生活』など。先頃出した『独立国家のつくりかた』が話題に。

ゆるく強靱な世界

する参加コーナーもある。輪郭のぼやけた名画は、ギャグ漫画との境界線も溶解するようだ。本欄でも取り上げられた

は、との問いに彼は次のように答えている。「テレビから流れるくだらない映像も深刻な映像も、等しくぼーっと受け取って」おり、

横浜市民ギャラリーあざみ野で開催中(八日まで)の「しりあがり寿★ワールド ゆるとぴあ」展を見てください。アニメ「ゆるめーしょん」シリーズの集大成である。会場にはゆるいキャラたちが躍り、セリフもすべてゆるい日常の断片。ムンクの「叫び」等の絵をトレース

が、しりあがり寿は「3・11後の世界」に率先して反応した作家の一人である。それが今回は、対照的なゆるゆるワールド。その意図

「僕たちはそういう世界に生きている」。だが、その「価値の順序立てがはつきりしない」ことに対する疑問も表明したいのだと。

(祝詞)